

# 常なる磐

つねなる いわ season II

令和3年7月9日(金)

その2

## ◇ 清掃についての<sup>いち</sup>一考察

本校児童の自慢の一つに「清掃活動」がある。手前味噌ながら、児童の取組は献身的の一言。全校での石拾いも然り。奉仕の心が形となって見えるようだ。

清掃の時間、低学年の児童は、身の丈ほどの箒(ほうき)を使い、扱いに悪戦苦闘しながらも埃や塵を集めている。この悪戦苦闘が大切で、経験を重ねるたびに箒の扱いが上手くなっていく。1年の長いスパンで見れば、箒を持つ位置や手の間隔、手の動かし方の変化(変容)は明らかで、上達を窺い取ることができる。

箒を持つ手の間隔ならば、こうだ。

低学年の児童は、箒を持つときに両手がかっつくほど手の間隔が近くなりがちだ。その方が支えやすいと感じるからである。しかし、手の間隔が狭いと、手を中心に箒に回転を与える扱いとなる。こうしないと掃けない(塵を集めることができない)のだ。日常動作ではない回転は、力の調整が難しいばかりか、勢いもつきやすい。軽い塵などは箒の勢いですっ飛んでいってしまう。それでも諦めることなく担度も挑戦し、丹念に塵を集めようとする児童の姿は、健気(けなげ)だ。

こちらも過剰な支援をぐっところえて見守る。

理論的には、箒を持つ手に適度な間隔があれば、回転させること自体が難しくなる。よって、自然に体の前で箒を平行移動させる動きになる。力加減もしやすく、スピード調整もしやすく、塵を飛ばすことなく集められるのだ。

見守り続けると、児童の手の間隔は次第に広がってゆく。同時に、箒の扱いが様になってゆく。児童に手取り足取り教えることは簡単だが、動作を教えてもなかなか身に付かない。その時にできても、次は忘れてしまう。なぜなら、児童は言われたこと、教えてもらったことをやることに懸命で、その効果を実感できていないからだ。一方、試行錯誤の過程であれば、そこに実感が加わる。「うまくできた」「今までよりいいぞ」。こうした実感を伴う動作は忘れないのだ。

試行錯誤しながら本人が見つけることが大事な成長であり、生きる力として備わっていく。

学習も同様であるが、作業・動作を伴う試行錯誤の体験は、習得という面においては特に有効だ。清掃で言えば、学校生活においては日課に組み込まれており、毎日行うのがあたりまえだ。この積み重ねと継続が、力となる。

日本は、清掃が日課に組み込まれている。中学校も高等学校も同様だ。だから、掃除道具入れが、校内各所にある。諸外国はというと、日本と同等ではない。

学校での清掃について世界 105 カ国を調査した出典によれば、児童・生徒が学校で掃除を行う国は 34.3%と、たったの 1/3。アメリカの大部分の学校がそうであるように、清掃員に掃除を任せる国は 58.1%と半数を超えている。

これは、アメリカをはじめとする多くの国にとって、清掃は「作業・職業」であり、「学習内容」ではないという考えが基になっている。「作業を清掃員に任せることで、児童生徒が学生の本分に集中できる」という考え方だ。合理主義のアメリカらしい。

東京ディズニーランドに初めて赴いた際、白色のコスチュームを身に付けた清掃員が、箒と携帯用ごみ箱を手際よく扱ってごみを取るのに感動したことがある。あれも「ショー」「パフォーマンス」の一つ。裏方を演出で見せる、なおかつ安全性・衛生度の高さを見せる。流石、商業大国アメリカの企業だ。

しかし、忘れてはならないことがある。ディズニーには従業員が 7,000 名いるらしいが、このうちの正社員は、採用後、一様に配置され、経験するのが「清掃員」なのである。しかも、結構な期間らしい。夜中の 12 時から朝の 7 時まで館に各所を清掃（毎日とのこと）する「ショーではない清掃」も経験する。つまり、ここで「心構え」「安全性重視」「おもてなし」などを体感しながら学ぶのである。観点は違えど、清掃を基本に位置付ける点は共感できる。

話を元に戻そう。

かつて台湾に観光旅行に赴いた際に、その民度の高さに感銘を受けた。それは、人に触れて感じる【親切さ】と日本以上の【街の美しさ】である。これら一般国民の【道徳心】【道徳に基づく行動】から、民度の高さを推し量ることができた。

そして、台湾も日本と同様に「清掃」が教育に組み込まれていることを忘れてはならない。

本校児童の清掃に取り組む姿勢も、道徳心の涵養がその根幹にあるのである。